



未来医療開発部の発足式=8月1日

臨床試験部

未来医療センターを統合

未来医療開発部を新設

他学部や企業と連携 シーズ掘り起こしも

新しい治療法から臨床応用までを一貫して円滑に進める未来医療開発部が8月、阪大病院に新設されました。同部は、新薬の治験や臨床研究を支援する臨床試験部と新たな治療法を探索する未来医療センターを統合し、またデータを管理するデータセンターを新設

して、基礎研究をより効率的に臨床応用へ結びつける役割を果たすとともに他学部や企業との連携も強化し、先進的な医療シーズが臨床現場でスピーディに実用化されるようにバックアップすることで、医療発展につながることを期待されています。臨床試験部はこれまで

未来医療開発部は、これらの研究を引き続き行うとともに、薬学部、歯学部や工学部など他学部の研究者が「何かに役立つかもしれない」と考えながらも、どのようにすれば良いのかが分からなかったシーズを掘り起こし、臨床研究へと橋渡しします。また、企業が開発する新薬や医療機器などについても、共同研究を行うことで最新の分析機器を使って新薬候補物質の有効性の有無を素早く検査し、動物実験や初めて人で試す早期・探索的臨床試験を行えるうえにデータ管理も一貫してでき、スムーズに治験、臨床応用、実用化へと結びつけることができます。澤芳樹部長は「学内

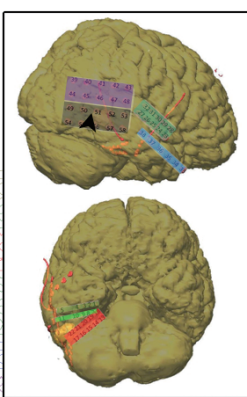
のシーズを調べたところ1年間に150もありました。未来医療開発部が設置されたことで、研究者が「臨床応用できる可能性が高まった」と期待を寄せています。

と考へ、モチベーションを上げることにつながります。そして、日本の医療レベルアップにも貢献できるのです」と、期待を寄せています。

てんかんセンター オープン

発作をいかに抑えるか

脳の表面に電極(脳図:▲位置)をおき、てんかん発作の始まりの部位を探す。てんかんが脳のどこから始まるか(脳波図:下線部)が分かると、その部位を切除することで、てんかん発作がなくなる可能性がある。



てんかんを扱っている診療科と看護師、医師等が連携して、てんかん診療、治療、ケア

を行うてんかんセンターが8月1日、阪大病院にオープンしました。各診療科が情報を共有することで診断、治療レベルをこれまで以上に向上させ、患者さんの生活の質(QOL)をより良くしていくことができる様になりました。

てんかんは、全身性いれんなどてんかん発作と呼ばれる発作を繰り返す病気で、乳幼児から高齢者まで年齢にかかわらず発症します。脳の外傷や脳血管の障害によって起こることもあり、原因や症状、病気のタイプはさまざまです。診断が難しく、治療も専門性が必要です。阪大病院ではこれまで小児科をはじめ、神経内科・脳卒中科、神経科・精神科、脳神経外科で診ていました。

問診によって発作の症状やその他の患者さんの様子を聞いたうえで、脳内のどこが発作を起こす部位かを調べるために脳波を検査します。発作が起こった時しか発作を起こす場所が分かりませんので、長時間にわたりビデオで脳波を記録・保存して検討したり、脳の活動により生じる微小な磁場を測定する脳磁図を作成したりして発作部位を探し当てます。さらに、MRIやPETなどによる画像診断も行い、総合的に判断します。同センターでは各科が症例を持ち寄って定

全4回シリーズ ~第3弾!~

患者さんと医療者のパートナーシップ みんなのこころにこころ いろいろた



①:二度三度 たずねることも遠慮なく 治療の主役はあなたです

すべての治療はあなたを中心にするべきです。病気についてはご自身でも勉強しましょう。わからないことやご希望があるときには遠慮なく病院の職員にお伝えください。



②:ホッとすると 相手に話そう 不安な気持ち

不安や悩みを一人で抱え込む必要はありません。家族、友人や病院の職員などに気持ちを伝え、一緒に治療に取り組んでいきましょう。

次回、第49号では「ハ(服薬管理)」と「(自己決定)」の句を紹介いたします!

禁煙外来 始まる 通院加療者を対象に

平成23年4月に阪大病院が敷地内禁煙となり、同年12月から保険診療としての禁煙外来が始まりました。保健センター内科医師3名と専任看護師1名、外来看護師長、医事課スタッフの協力を得て、地下1階放射線科外来の一室を使用し、毎週木曜日午後の診療枠でスタートしました。阪大病院に通院加療中の患者さんで、原則院内紹介、完全予約制で受け付けています。これまでに、11名の禁煙希望の患者さんを各科よりご紹介いただきましたが、手術前にご紹介いただくケースが多いのが特徴です。すでに、2名の患者さんが無事禁煙に成功され、3月に阪大病院修了証書第一号の授与式、4月には第二号の授与式(写真)を実施しました。まだ予約枠には十分空きがありますので、積極的な禁煙が必要で、ぜひ禁煙したいと思っておられる患者さんをご紹介下さい。

が、阪大病院は技術的にも治療件数でも全国的にトップレベルです。外科的な手術ができない時は、薬をうまく使ってできるだけ発作を抑え、発達に影響がでないようにコントロールします。さらに同センターでは、臨床心理士や理学療法士と連携して発達をサポートし、MSWが社会生活におけるアドバイスも行います。大園恵一センター長(小児科)は「てんかんは社会問題にもなっています。診療科の枠を超えた的確な診断、治療はもちろんですが、てんかんに対する理解も深めてもらえよう力を入れていきます」と、話しています。

### 「サウンド・オブ・ミュージック」にのせて



10月5日に「秋のミニコンサート」が開催され、箕面市を拠点に活躍されているアンサンブル〈銀の鈴〉の方々に出演していただき、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の中から皆さんご存じの曲を披露してくださいました。最後に全員で「ドレミの歌」を歌い、秋の夜長のひとときを楽しんでいただきました。

### 病院見学会～医療の現場を実感～

9月28日に病院見学会を実施し、応募者の中から抽選で選ばれた一般市民14名が参加されました。



参加者は病院の概要説明を受け、ヘリポートでドクターヘリを見学。未来医療開発部では再生医療、iPS細胞等の研究現場に触れ、内視鏡センターと薬剤部の見学を行いました。普段見たり入ったりする機会のない施設を案内し、病院における安全管理体制を実感していただきました。

### 一日看護師体験

### 「幅広い仕事を自分の目線で」



高校生を対象とした大阪府主催の「一日看護師体験」を7月26日に実施し、7名が参加しました。

午前中、患者さんとの会話、清拭や足浴、血圧測定や検温等を体験した後、病院食を味わいました。午後は手洗い・正しいマスクのつけ方講習、病院の見学などをして、和やかに過ごしました。参加者からは「幅広い仕事を看護師の目線で体験できました」などの感想が聞かれ、看護職を目指す生徒には将来の看護師像を具体的に描けたようです。

### 「がんの予防と早期診断」

### 市民公開フォーラム参加者募集！

日時 12月1日(土) 午後1時～3時30分  
場所 大阪大学医学部講義棟A講堂  
定員 240名(先着順)

#### 【講演内容】

- 1 **がんの検診と早期診断(肺がんを中心に)**  
大阪府立成人病センター がん予防情報センター 疫学予防課 課長 中山 富雄
- 2 **子宮がん検診とHPVワクチン**  
大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科講座(産科学 婦人科学) 講師 藤田 征巳
- 3 **がん登録から見た我が国のがんの現状とがんの予防**  
大阪大学大学院医学系研究科 社会環境医学講座(環境医学) 教授 祖父江 友孝

【申し込み方法】 はがき、ファックス、電子メールにより、氏名、性別、年齢、郵便番号、住所、電話番号を明記のうえ、下記へ送付(個人情報保護は、本件以外の目的には使用いたしません)

【あて先】 〒565-0871 吹田市山田丘2-15  
大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係  
TEL06(6879)5020.5021 FAX06(6879)5019  
E-mail ibyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp

【決定通知】 参加の可否をはがきでお知らせします。

※ご来場の際は、公共交通機関をご利用願います。



### 未来医療開発部長 澤 芳樹

大阪大学医学部附属病院では8月1日より、臨床試験部と未来医療センターの統合によって未来医療開発部が設置され、初代部長に就任させていただきました。この

10年間において、それぞれに発展してきた両部門を統合・合理化し、アカデミア発の未来の医療を日常医療に届けられるように、探索的臨床研究から治験そして商品化へとシームレスに繋げ、一人でも多くの患者さんのご期待に添えるように努力していきたいと思っております。

(平成24年8月1日就任)



### てんかんセンター長 大藪 恵一

てんかんは小児から高齢者までみられる頻度の高い慢性神経疾患であり、小児科・神経内科・脳卒中科・脳神経外科・神経科・精神科において診療を行ってまいりました。近年、新規

の抗てんかん薬が開発され、外科的な治療も行われ、てんかん治療は進歩しています。しかし、なお、発作コントロール困難例が約2割あります。本院では、上記の診療科が協力して包括的かつ高度なてんかん診療を行うために、てんかんセンターを設けました。また、臨床心理士及びソーシャルワーカーなどによる患者サポート体制の充実も図ります。てんかんセンターを基盤にして、さらなるてんかん診療の発展に向けて努力するつもりです。

(平成24年8月1日就任)



エコーで骨や関節の異常を診る

## 免疫・アレルギー内科

# 研究と臨床タッグ、膠原病など難治性疾患を診療

免疫・アレルギー内科は、免疫学の最先端研究と臨床をリンクさせて難治性の免疫疾患の新たな治療法を開発

するとともに、膠原病の的確な診断・治療で、トップレベルの診療を行っています。関節リウマチや全身

性エリテマトーデス、強皮症などの免疫疾患である膠原病は、市中病院では適切な対処ができないことがあり、他府県からもたくさん

の患者さんが当科に紹介されてきます。特に関節リウマチに関しては、インターロイキン6(IL-6)とい

う免疫関連物質が関節の炎症や変形に大きく関与していることを本学の岸本忠三名誉教授が明らかにしました。

IL-6の働きだけを抑制する薬、トシリズマブが開発され、当科などでの治験を経て、日本発の関節リウマチ薬として全世界で使われるようになったのです。

## より質の高い看護を目指し

### カリキュラムを工夫し、選択受講制

### 看護部キャリア開発センター

看護部キャリア開発センターは、看護師の臨床実践能力を高めるとともに、より高度な専門性を身につけるといふ点で、看護の質向上に大きく貢献しています。

同センターは8年前に、院内のクリニカルラダーのレベルⅡ(一人前と認められた看護師のレベル)に達した看護師が、より高い専門性を発揮できる能力を獲得するように設立されました。またキャリア開発を推進していくため

に、各自が空き時間を利用して必要な研修を選択受講できるシステムを採用し、これまでに約2000人がチャレンジしています。研修は専門分野別にコースに分かれ、それぞれ初級、中級、上級と積み上げていけるように構成されており、上

級コース修了者には認定バッジを授与しています。修了者たちは現在、その専門分野のリーダー的存在として活躍しています。

今年度からは、研修内容を大幅に見直し、レベルⅡの看護師は、自分の将来を明確にイメージするのが難しく、自分が明らかにできなかったことで、Basicコースとして、専門分野を特定せずに受講できるコースを設けました。



熱心に学ぶ看護師たち

なりつつある膠原病の原因となる物質をターゲットにした治療ができないかなど、研究と臨床がタッグを組んで難治性の免疫疾患の診療にあたっています。他の診療機関で「原因不明」として紹介されてきた患者さんを、臓器別に診るのではな

く、体全体を総合的に診ることで免疫疾患を的確に診断します。熊ノ郷淳教授は「基礎研究にも臨床にも力を入られて、難治性の免疫疾患に効く薬や新たな治療法を開発し、一人でも多くの患者さんの笑顔を取り戻したい」と話しています。

す。Basicコースに続いてより専門性の高いAdvancedコースも用意されています。看護師の多くは女性で、妊娠、出産などで女性特有のライフステージがあり、それらを考慮したキャリア開発が必要で、同センターでは、気軽に研修を受

新任部長・施設長ごあいさつ